風刺詩『詩の女神と音楽の女神』

訳：西　村　光　弘

訳者まえがき

ここに訳出したのは、1695年にパリで出版された作者不詳の風刺詩『詩の女神と音楽の女神』である。

この作品が、作者不詳であることから、その作者を見出す試みがなされている。以下の著作物がそれに当たる。

Les dernières poésies retrouvées de J. de La Fontaine : Ode a Monsieur Despréaux, La Poésie et la musique, Satire, Cantiques spirituels, 1695, reproduites en photogravures : 570 vers inedits de La Fontaine. Découverts, et présentés par Gaston Vidal. Avignon : J. Aubanel, 1979.

これには、『詩の女神と音楽の女神』のリプリント版と、1979年1月29日にモンペリエ科学文芸アカデミー Académie des Sciences et Lettres de Montpellier に於いてアカデミーの承認を得て行われたガストン・ヴィダル Gaston Vidal [Secrétaire perpétuel de l'Académie des Sciences et Lettres de Montpellier, Président de l'Entente Bibliophile] による「ラ・フォンテーヌの最後の詩作品の発見 Découverte des dernières poésies de La Fontaine」と題する講演の講演録が収められている。

ヴィダルのこの講演の主題は、1694年10月26日にラ・フォンテーヌが友人のモクロワ Maucroix に書いた手紙[1]にある「私には、まだ大きな構想があります。J'ai encore un grand dessein」という言葉の『大きな構想 grand dessein』というのが、この風刺詩に当たるのだ、ということを明らかにすることであった。

彼ヴィダルは、この講演の内で、以下の事柄を話している。また、この風刺詩がラ・フォンテーヌの筆による物であるということを示す根拠を挙げている、それらの一部を以下に紹介する。

- この風刺詩が「デプレオー氏へ」と題されているが、より具体的、直接的には、ボアローが1694年にパリで出版した、女性と結婚に対しての『風刺詩 10 *Satire X : Dialogue ou Satire X du sieur D.****』に応答しての風刺詩であるということ。
- 1929年に書誌学者エミール・マーニュ Emile Magne が、彼の『ボアロー作品の総括的文献目録 *Bibliographie générale des Œuvres de Boileau*』(Tom2, page 303) に於いて、『詩の女神と音楽の女神』を引用してはいるが、この作品そのものには全く興味を示してはいないということ。
- ボアローが1678－79年に書いたと考えられている『オペラのプロローグ *Prologue d'Opéra*』(オペラ自体は未完成、上演もされず)、これが公にされたのが1713年に出版されたボアローの『作品全集 *Œuvres complètes*』に於いてである。それにもかかわらず、風刺詩『詩の女神と音楽の女神』は、このボアローの『オペラのプロローグ』に呼応していると考えられる。それは、ボ

アローのプロローグに於いても、詩と音楽とのあり方が主題となっているということ、更に、ボアローのプロローグに登場する詩の女神の台詞に於いて挙げられる固有名詞「ティルシス」と「クリメーヌ」が、風刺詩『詩の女神と音楽の女神』(17-20行目)に於いても挙げられているということ、によってである。

詩の女神

ええ、貴女[=音楽の女神]は、泉の岸辺で、
私と一緒になって、恋の苦しみを遣る瀬無く歌うことが出来ますし、
ティルシスを悲しげに泣かせる事も、クリメーヌをすすり泣かせる事も出来ます。

(拙訳、傍点は訳者がふる)

1695年以前の時点で、ボアローのプロローグを読み得る立場にいるのは、ボアローと親しい間柄にある者だけであると考えられるが、ラ・フォンテーヌとボアローは、親しい仲にあった。

- 風刺詩の50行目に「この新参の風刺詩家 ce nouveau Satirique」という言葉があるが、事実、ラ・フォンテーヌは、風刺詩 Satire を書いたことが無いということ。
- 『キリスト教詩そして様々な詩の選集 *Recueil de Poésies chrétiennes et diverses*』に、ラ・フォンテーヌが1671年に書いた『詩編17のパラフレーズ *Paraphrase du Psaume XVII*』の中の詩行と、この風刺詩にある『宗教的カンティクムIV』とが類似しているということ。

これらの他にも、この風刺詩がラ・フォンテーヌ作であると考えられる根拠を、ヴィダルはいくつも挙げている。

●風刺詩『詩の女神と音楽の女神』の研究の余地

ヴィダルが、この調査を行ったのかどうなのか、彼の講演録からだけでは判らないが、次に挙げる調査も、著者探索には有効な方法の一つであると考えられる。それは、この風刺詩の最後にある著者の後書きに「これらのカンティクムは、サン=シールにある高名な施設の為に作られ、モロー氏によって歌を付されました。」とあることから、『宗教的カンティクム』に曲を付けたとされるモローの楽譜の探索である。もし、モローの『宗教的カンティクム』の楽譜が現存するのだとしたら、その楽譜に、詩の作者名も書いている可能性があるのではないだろうか。

サン=シールの女学院における音楽の研究については、アンヌ・ピエジュス Anne Piéjus が、第一人者として研究を行っている。しかし、まだまだサン=シールの女学院での音楽についての研究、モローについての研究は、途上にある様である。サン=シールの女学院との関係に於いて、この風刺詩『詩の女神と音楽の女神』を研究して行く事は、研究として実りのあるものになって行くのではないかと、考えている。そして、もちろん、風刺詩『詩の女神と音楽の女神』の作者を、ラ・フォンテーヌだとするのならば、サン=シールの女学院とラ・フォンテーヌとの関係も、研究対象として興味深い事柄ではないだろうか。

●風刺詩『詩の女神と音楽の女神』の構成

表題の頁は、以下の様である。«LA POËSIE / ET / LA MUSIQUE. / SATIRE. / A MONSIEUR DESPREAUX. / A Paris, / Chez DENIS MARIETTE, ruë Saint Jacques, / prés les Mathurins, à l'Esperance. / M. DC. XCV. / AVEC PERMISSION.» (許可 permissionと書かれてはいるが、国王の允許 Privilège du Roy も含めて、その様な類のものは、この著作物の中には見出せない。)

表題の頁の次の頁では、以下の題 «A MONSIEUR / DESPREAUX. / ODE.» を先頭に、頁番号の振られていない頁、4頁に渡ってオードが続く。このオードは、7音節詩句が10詩句で一詩節を作り、その7音節10詩句一詩節の単位が、7詩節連なることによって形成されている。

次は、2頁から14頁まで頁番号の振られた計14頁の風刺詩が続く。題は以下の様である。«LA / POËSIE / LA MUSIQUE. / SATIRE.» この風刺詩は、アレクサンドランを用い、360詩句より成っている。

その次に、2頁から8頁まで頁番号の振られた計8頁の宗教的カンティクムが続く。題は、«CANTIQUES / SPIRITUELS.» となっている。ここには、5つのカンティクムが在り、音節数が様々な詩句合計140詩句より成っている。8頁目、5番目のカンティクムの後、FINの言葉の後に、筆者によって書かれた、散文による小さな後書きが付いている。

凡例

一、この翻訳の底本は、以下のものである。

Anon. *La poësie et la musique. Satire. À monsieur Despreaux*. Paris, 1695.

一、括弧による重訳や文意の補足は、なるべく訳文それ自体で原文の全てを語らせるという方針に従って、これを避けた。

一、訳文の中で語の右肩に付した数字による、語や事項に関しての注解は、訳者が付したものであり、後の「註」に示されている。また、原文の satire の中に一箇所だけ存在する原注「☆」も、訳文の中で「☆」を付け、後の「註」に訳注と一緒に示した。

一、固有名詞のカナ書きに際しては、フランス人の名前等は、フランス語の読みをカナ書きとすることとし、ギリシャ・ローマの人物や神々、聖書に登場する人物等に関しては、以下の「参考文献」に挙げた文献の読みに従った。

参考文献

逸見喜一郎『ギリシャ・ローマ文学 — 韻文の系譜 —』東京:放送大学教育振興会、2000年。 — 放送大学教材。

『岩波 西洋人名辞典 増補版』東京:岩波書店、1991年。

岡本仁助、岡道男、中務哲郎編『ギリシャ文学を学ぶ人のために』京都：世界思想社、1995年。
『ラテン文学を学ぶ人のために』京都：世界思想社、1995年。
呉茂一『ギリシア神話』東京：新潮社、1969年。
高津春繁『ギリシャ・ローマ神話辞典』東京：岩波書店、1969年。
『聖書 新共同約 旧約聖書続編つき』東京：日本聖書協会、1996年。
ピンダロス『祝勝歌集 / 断片選』西洋古典叢書 第II期第13回配本 内田次信訳 京都：京都大学学術出版会、2001年。
ホメロス『オデュッセイア』上・下 松平千秋 訳 岩波文庫、1994年。
『ラルース世界音楽事典』上・下 遠山一行、海老沢敏編 東京：福武書店、1989年。
『ホラティウス全集』鈴木一郎訳、東京：玉川大学出版部、2001年。
Airs sérieux et à boire à 2 et 3 voix. Édition par Frédéric Robert. Paris : Heugel, 1968.
Boileau, *Œuvres complètes*. Introduction par Antoine Adam; Edition établie et annotée par Françoise Escal. Paris : Gallimard, 1966.
La Fontaine, *Œuvres complètes*. Vol.II, *Œuvres diverses*. Édition établie et annotée par Pierre Clarac. Paris : Gallimard, 1958.
Molière, *Amphitryon : comédie*. Introduction et notes par Pierre Melese. Genève : Droz, Lille : Giard , 1950
Racine, *Théâtre-poésie*. Édition présentée, établie et annotée par Georges Forestier. Paris : Gallimard , 1999.
The New Grove dictionary of music and musicians. Edited by Stanley Sadie; executive editor, John Tyrrell. 2nd ed. 29 vols. London : Macmillan Publishers,2001.

デプレオー[2] 氏へ

オード

デプレオーよ、君が、パルナッソス山[3]の上から
へぼ詩人たちに目掛けて一度に、
雷を落とすのを私が目の当たりにするとき、
なんと、私は君の高貴なる果敢さを愛することだろう！
君の羽根ペンは、
精彩のない本の上に、
それにふさわしい辛辣な言葉を投げかけた。そのペンの、まさに焔によって
君の羽根ペンは、正確なペンとなっている。
正確なそのペンは我々に、
真の美の模範を示している。 (10)

＊

滑稽さが指摘される様な
あらゆる箇所に於いて、
それを攻撃したいという欲求を
疼かしている君の精神を、私は観とめている。
全ての者が気に入られたいと思う、女性という者は
君の手厳しい批判の女神[4]からの
攻撃をかわすことは決してない。
私達の悦楽の空しい対象である
この女性は、自分の悪徳の正体が暴かれ、
自分の欠点が突かれるのを目の当たりにする。 (20)

＊

　その他、好ましい誠実さというものが、
不平の声を張り上げる為に
揺れて、虜になってしまった
不明な点を探すであろう。
私達に教育するために、君の作品の中にだけ
現れようと、いつでも待ち構えている
その誠実さというものが、勝ち誇った態度で、
君の衒学的な怒りを起こしにやって来る。
また、君の素直で従順な読者の

精神と心情を規制しにやって来る。 (30)

＊

しかし、風刺好きのムーサ[5]は、
君のみを喜ばせているのではない。
驚異と勇壮が、
君の穏やかな余暇を分け合ってしまう。
イーカロス[6]のような宿命を恐れなければ、
君は殆んど踏み均されていない険しい道に於いて
型にはまらぬ詩人ピンダロス[7]に従い、
その結果、輝かしい徳の
記憶を確立することによって、
栄光に包まれることが出来る。 (40)

＊

私自身の非力さを斟酌しない、
君の活き活きとした精神が持つ
私を不快な気持ちにさせる誤謬に対して
私のアポローン[8]は、備えを固めた。
私が不満に思うのは、
我々の間に在る合奏と脚韻の
崇高なる技芸が、冒瀆されている、ということだ。
そして、この神々しい言語活動が、
愛の悦楽を味わうことを運命づけられた貞節を
褒め称えている、ということだ。 (50)

＊

怒った女性は、私の読者全てを
追い払わざるを得なかった。
私は、今日、全ての女性崇拝者の
不興を買わなければ、ならなかったのだろうか。
デプレオーよ、君に倣って
私は人々が虚栄心に拠って建てた
神殿をひっくり返したいと思っている。
また、真実が燈した
聖なる純潔な焔のみを
自分の心に許したいと思っている。 (60)

＊

　真実よ、あまりに清純な美よ
あなたの名だけが、私を優しい気持ちにさせる。
あなたは、精神の糧であり、
精神への魅力である！
真実の忠実な弟子である君よ、
真実に対して抱く私の愛が、
この詩の中で爆発するのを見ていてくれ。
それ故に、私が君に思い切って見せる
この風刺詩から、あらゆる値打ちを
私は引き出そう。　(70)

詩の女神と音楽の女神

風刺詩

どの様な変調を来たした精神が、そして、どの様な盲目の偏愛が
誤謬へと、諧調の女神を捧げてしまうことを絶えず求めているのだろうか。
愛する歌手達よ、私はあなた達の歌声によって
バッコス[9]と愛の悦楽の神々[10]が褒め称えられるのを、絶えず聴くことになるのだろうか。
数限りない不純な箴言が、
合奏と詩とを利用して、私達の間に、打ち建ち、
声の魅力を頼りに理性の不意を突き、
無垢な魅力を頼りに猛毒を精製するのを、私は目にすることになるのだろうか。
ご婦人方の口に上る美しいカンティクム、
何という、彼女たちの秘めたる恋の炎に基づく恥ずかしい告白。 (10)
あらゆる者が払わなければならない、愛に対する義務を
彼女達が払っているのだ、という、何といういつも変わらぬ考え！
若さを構成している驚くべき神秘とは、
私達の歌声を使って、絶えず慎重さを扱き下ろすこと、
慎重さを煩わしい呼ばわりするということ、そして、私達の欲望を、
喜びを享受するという抗い難い規範に従わせたりること！
恋の発作で思い悩んでいる**ティルシス**[11]は
自分の滑稽な嘆きを、岩の如き人々に対してぶつけようとしている。
羞恥心の名残でさえ抵抗を示す相手である、**クリメーヌ**[12]は、
岩の如き人々の熱意へと、自由気ままな鳥を憧れる気持ちをもたらす。 (20)
自分の務めに従う忠実な美女は、
音楽の流儀では、つれない女と呼ばれている。
宴会の只中においては、名高い放蕩者
彼は賢人であり、運命に勇敢に立ち向かう英雄である。
ある時は、大げさに泣くのは恋をする男であり、
またある時は、法悦に浸るのは酔っ払いであったりする。
ある者は、**イーリス**[13]を以って、崇拝の対象としたり、
またある者は、自分自身の浄福の心を陶然とさせたりする。
私達が至る所で鳴り響くのを耳にする賛辞は、
愛の悦楽の神々への賛辞、そして、ぶどうの収穫の神への賛辞である。 (30)
人類の幸運の采配者達、だとか言われている

彼らに対して人々は、ふんだんな称賛という御香を、そこで撒き散らしている。
　軽薄なこれらの歌に対する熱狂とは、いったい何なのだろうか。
人気者達が、私達の間で、得意げにしているのを、私達は見る必要があるのだろうか。
そして、うそ偽りの崇拝という醜悪な深淵に
宇宙は、今や、再び沈んで入ってしまうのだろうか。
私は、アナクレオン[14]を許容する。私は、ティブルス[15]に、
彼が胸を焦がす恋の炎についての甘い表現を、容赦する。
ホラーティウス[16]は、ウェヌス賛歌[17]を歌うことができた。
私は、誤って先入観を持たれてしまっている、これらの素晴らしい霊魂達に同情する。　(40)
しかし、信仰が私達の眼前で、信仰の光をちらつかせているのに、
なぜ、死に絶えた神々の遺骸を蘇えらせるのか。
信仰の厳かな力を崇める為に、空しく、
真の神の祭壇の上にて、私達の釣り香炉が煙りを上げている。
私達の愛の歌々の世俗の言葉は
私達の崇拝を覆し、私達の尊崇を否定する。
もし歌声が、心からの活き活きとした表現だとするのならば、
愛の盲目の情熱を歌う人、
バッコスの司る酒の下品な悦楽を褒め上げる人は、
かなりの供犠を、放逐された神々に対して払っているのだ。　(50)
つまり、心が書き取らせた仰々しい賛辞よりも
澄んだ、何という、異教の神の為の御香を。
　ところで、この新参の風刺詩家は、何を望んでいるのだろう、と人々は君に言うだろう。
また、**この男は間違いなく音楽の女神を愛してはいない**[18]、とも言うだろう。
私は、音楽の女神を愛している。：それでは、私達の感覚の為になるような
より穏やかで、より素朴な娯楽を、考え出す事が、人々は、お出来になるのでしょうか。
当節は、不運な条理、文(あや)を和らげるために
間違いなく、音楽の女神は、死すべき定めの存在、人間に引き渡されてしまった。
最初の者は、何と祝福されているのだろう。その者の心の幸せな昂ぶりが、
声によって、音調と和音とを調和させたのだ！　(60)
幸せ者達、彼等は崇高なる詩の女神を案出するのに充分な程、
美しい火によって捕らえられた魂を生きる者達。
音楽の女神と詩の女神はどちらも、耳を魅惑するような魅力を持っている。
一方、そのそれぞれは、それぞれのやり方で、別々に、私達の気にいるものとなっている。
しかし、私達の詩歌に於いて、それらの甘美さが結び付けられている時、
何と、人は、この二人の姉妹[19]による、快い諧調を混成することが出来るのだ。

今日の向上し、高みにある精神は、
かつて落ちて来た場所である天へと、昇り上がっていく様な気がしている。
創意工夫を凝らされ表現された心の昂ぶり、分別のある一時の恋、といったような
あなた方の大きな悦楽を、非難したり、 (70)
私がこの上ないと考える喜びを、禁止する為に、この詩を詠んでいるのではない。
人々がこれらを濫用することだけを、私は非難攻撃しているのである。
その源泉の神々しい、韻文は
私達の間で、その素晴らしい素性を取り外してしまっていることに、私は嘆いているのだ。
　昔、森で流浪の生活を送っていた人類は、
唯一、粗野な音だけを用いて、自分の考えを表現していた。
しかし、町の城壁の中へと守られると、
より穏やかで、より礼儀正しい習俗を手にしたのだった。
そこで、お互いが助け合うことに応じる為に、
話(わ)の規則を創り上げなければならなかった。 (80)
極々わずかの表現力しか持たなかった人類集団は、この段階までで
やっと、地を這うような下品な散文を口に出しているに過ぎなかった。
人はそれぞれ、さもしい商売取引にすっかり心を奪われていた。
そしてまた、この狭い範囲の枠の中に包まれた精神は、
美しい話(わ)を、朽ちることのない優美なものとする
鮮やかな火花を、未だに放ってはいなかった。
地球には天が宿っているのだ、と人は知っている。
それは、私達を喜ばせたり、私達を苦しませたりする
私達の幸運の至高の采配者たる
天が、異教の神を、死すべき定めの人間の眼から、隠しているからである。 (90)
精神は、この事を報じるまでに昇りあがり始めている。
各々は、天へと達する目的で、天に気に入られようとしている。
しかし、ヘブライ人という幸いな民族は、
真の礼拝の道に、就かされている。
唯一この民族だけが、天について学んでおり、何とも気高い努力によって、
自分達の心の昂ぶりを、自足せる神[20]に、表わしているに違いない。
最初の者、モーセ[21]は、例の海岸で、
崇高な言語活動である韻文を声に出して詠み上げる。
神の息吹によって活き活きとさせられた預言者は、
甚だ奔放な声調で、打ちひしがれたファラオを歌い上げる。 (100)
彼の声は、天に、地に、聴かれる。

海は、その声を聴く為に、揺れ動く波を静める。[22]
まったく同じ気持ちで、S王[23]は、韻文に於いて
あの巨大な宇宙に対して、神を祝福するように乞う。
太陽は、山々、野原を生き生きさせ、
鳥達、木々、泉に語らせる。
そういうわけで、この美しい技芸を生みだす見事な創作の才は、
愛と賞賛の心の昂ぶりであった。
しかし、自分自身の外に在る想像力[24]を、まず、引き出す為には
真の神の至上の威厳が必要であった。 (110)
その次に、英雄達の戦いを、人々は歌い上げた。
若きダビデの勝利が、
巨人ペリシテの倒落と最期を褒め称えさせた。
ユダヤ人の女性の歌によって、人々は栄光を褒め上げた。[25]
神の行いや奇蹟的な出来事の他に、
第一級の韻文の偉大さ、驚嘆を生んだものは無い。
　ホメーロスも俗世の作家達も、君主も、聖父も
この足跡を辿っているのだと、私には直ちに分かる。
偉人ホメーロスには、精神が非難するようなことは、
より一層求めるべきであった真の神を無視したということの他には無い。 (120)
ところが、彼は自分自身の誤りに対して思慮深いので、羽ペンで以って
自分が敬う英雄達、そして敬愛する神々の栄光を称えている。
ホメーロスの叙事詩歌に於いては、常に真実が扱われている、というのではないとしても、
常に、英雄的行為、そして異教の神が扱われているのである。
　この余りにも稀有な人物ホメーロスの高名な後継者達として、
ソフォクレース、エウリーピデース、ピンダロスが後を継いでゆくのを、人々は目にし、
そしてまた、彼等三人ともが、自分達の作品を、習慣風俗を形作る為に奉げるのを、目にし、
また、彼等三人が、徳の高名な伝令者達である、ということが人々は分かった。
　その時に、彼等の恐るべき能力を増す為に、
音楽の女神が、愛の神に餌を与える様なことは決して無かった。 (130)
というよりむしろ、音楽の女神の穢れ無き協和音の甘美さが、
心の中にある愛の神による無分別な心の昂ぶりを、抑えていたのだ。
留守にしているアガメムノーン[26]の嫉妬深い愛情が
夫婦の愛の誓いへと、彼の妻を、抑え留めたのである。
それは、彼の雄弁な声の調子が、慎み深さを抱かせるような
名高い歌人が、彼女の傍らに居た限りにおいてである。[27]

アイギストス[28]は、自分の不貞な欲望を満足させる為に、
この歌人の命を奪わなければならなかった。[29]
そしてまた、立派な壁を建設する為に、
最も硬い大理石を、アムピーオーン[30]が、曲げることが出来た時、 (140)
あらゆる者どもが、彼のリラの女神に、何と、熱心に耳を傾けたことか。
また、悲しむアリオーン[31]の悲しげな音楽が、
海の怪物等に、何と、アリオーンを救い遂げさせたのだ。
はたして、彼等が、自分の愛情を歌っていた、と人は思っているのだろうか。
また、あまりに素晴らしく、また、ギリシャの至る所であまりに称賛される奇跡、
これらの奇跡は、軟弱さに満ちた歌による幸運な結果なのだろうか。
そして、あまりに素晴らしい技芸による奇跡的なまでのこの様な巧みな表現が、
神話時代の物でしかない様に、仮に、思えるのだとしても、
巧みに爪弾かれるハープが
サウル王の常軌を逸した激怒を静めた[32]、ということを、知らない人が在るだろうか。 (150)
素晴らしい合奏の力、つまり影響力、とは、以上の様なものであり、
あらゆる者は皆、素晴らしい合奏を聴くことで、改心し務めへと戻るに違いないのだ。
素晴らしい合奏の、とても良く調整された音高から成る正確な協和音は、
知性上の欲求を、精神へともたらしてくれるに違いない。
そうだが、どの様にして、それほどの完璧な音の調和が、
理性の権限範囲を侵し得るのか、私にはよく分からない。
もし、音楽の女神に、心を和ませることが出来るのだとすれば、
音は潔白で、韻文の神だけが罪があることになる。
あらゆる合奏は、自ずと私の精神を向上させてくれる。
詩人、彼だけが、私を謙(へりくだ)らせ、私の琴線に触れる。 (160)
　愛の狂熱を表現する為に、かくのごとくに、
今日、我等がへぼ詩人達は、リラの女神を鳴り響かせている。
また、覚え易い自分達のマドリガル[33]の中で、
宗教的罪についての果てしのない思い出を描いている。
壮麗さ曝け出る見世物の中で、かくのごとくに、
彼等は、穢れた道徳を公に見せにやって来たり、
また、数限りない繰り返しという共通した特徴によって、
心の中にある感覚上の喜びへの渇きを駈り立てにやって来ている。
　巧みな快い調べが、これらの韻文の上に放つ物である
輝き、そして限りない気品とはどの様な物なのか、私は知っている。 (170)
粗野な才能を露呈することなく、

誰が、リュリの霊に対する敬意を拒むことが出来るだろうか。
私ならこう言えるのではないだろうか。驚嘆すべき傑作に次ぐ驚嘆すべき傑作を書くことによって
彼は、耳を、美の女神たちに慣らし過ぎてしまったのだ、と。
真似の出来ない手本を、彼は
彼の後(のち)素晴らしいと思うものを観ることはないのではないかという悲嘆の中へと、投入するのである。
　博学なリュリよ、戻って来ておくれ。願わくは、君の霊が、今、
オルペウスのごとくに、霊の住処から逃れ来んことを！
私達の心に、より慎みのある喜びを与える為に、
悔悛する国王陛下に、溜め息を繰り返して頂く為に、戻って来ておくれ☆　(180)
そして、溺愛する君の舞台の、空しい残骸の上に、
領主陛下の偉大さを称える劇場を建立する為に,戻って来ておくれ。
　どうしてだろうか。感覚上の喜びには、
彼の巧みな表現の繊細さを更に磨く為の魅力を欠いている、のだろうか。
ペテン師である小器用な劇場道具方は、自分の技術を用いて
動かない庭園を、たちまちの内に動かしてしまう。
彼は、砂漠の中に、宮殿を建て、その動かない庭園を投じ入れてしまう。
天を落下させ、黄泉の国を開かせしめてしまう。
想像を越えた世界の王国をすべて、彼は駆け巡る。
幾千もの魅惑的な幻達が、至る所から彼の前に現れる。　(190)
国王達、王女達、羊飼い達、妖精達、異教の神々達、
詩の精である輝く自惚れ達、である。
この者等の住む辺境の地を、ゼフィロスが飛びまわっているのを、自分達は目にしているのだ、と人々は信じている。
魔法による幻惑が、この者等の声を、心の奥底へともたらすであろう。
魅惑された観客は、運ばれて行って、あらゆるものを目にするのである。
この観客は、今自分が起きているのか、はてまた、眠っているのか、分からないのである。
この様な壮麗な舞台は、ついには、どこまで行き着くのだろうか。
この壮麗な舞台は、私たちの心の中にある人間の情念を募らせる。
そのような舞台の目指すところは、数多の余興によって、
愛の悦楽の神々に追従するうわべだけの甘い言葉を述べることである。　(200)
官能的な魅力によって萎えた理性は、
愛の悦楽の神々による罪深い激発を、起こさせる。
あまりに美しい見世物の年若い愛好家は、
そのせいで、心の中で、実際の俳優に成りきるのである。

エイコスXV

彼は、愛を感じやすい感情で、頭をいっぱいにして出かけて行く。
彼は、愛が湧き出る致命的な源泉を捜し求める。
彼がまもなく備えることになる災いに対して、今現在盲目な
彼はメドール[34]と共に、見世物で飲んで酔っ払いに、急いで行くのである。
こういったことが、感覚上の喜びを惹きつける見せかけというものである。
これは、嗜好を欺くか、さもなければ、本性を引き倒してしまうかである。 (210)
愛の喜びへと、少しでも早く身を落とす様に
しつこく急き立てる私達の欲望に対して、人々が付与しているのは、何と重要性である。
　劇場がその名を有名なものとしている著作家達よ、さあ、
素晴らしい歌唱法に、当初の輝きを取り戻させ、
さらに、最大限に厳しく、最大限に仕事熱心な検閲官に
君達の歌の害の無い甘美さを認めさせることを、してくれますか。
詩の女神を、さらに荘重にも、そして、さらに控え目にもなさせ申し上げたまえ。
音楽の女神を、その当初の慣用へとお戻ししたまえ。
真の神の聖なる威厳を称えたまえ。
徳の女神の不死の美を歌いたまえ。 (220)
英雄達の能力と栄光を広めたまえ。
そして、歴史のちょっとした特色をこそ、訓戒の為に、用いたまえ。
　かつて、ギリシア人達の舞台の上では、ある俳優が
彼の時代の幸せ者達の栄華を賛美していた。
そして、好ましい節度というものに囚われずに、
感覚上の喜びを深く愛し、富を誉めそやしていた様である。
観衆は、この下劣な語りによって、感情を害される。
観衆は、文句を言うことによって、その怒れる心を露わにする。
要するに、遠慮の無い熱烈さは、平土間席から
俳優と詩人を罵りに行きたいと思っているのだ。 (230)
そういった時、エウリーピデースは、隠れてしまったようである。
そして、「あまりにも熱しやすく冷めやすい観衆諸君よ、大詰を期待したまえ」と彼は言う。
彼の声は、直ちに、観衆の騒擾を一旦静める。
その思い上がった金持ちの最期は、悲劇的なものとなる。
その後で、とても満足した分別のある観衆は、
その作品に拍手を送り、作者に感謝する。
　このように、アテナイのムーサは、娯楽として
キリスト教についての学習の場を、劇場で開催しているように見える。
ムーサは、気が狂った様に争った者達全ての心に、

神々に対する尊敬、徳の女神に対する愛を吹き込む。 (240)
しかしながら、不幸で、真に受けやすい、かの詩人達は、
馬鹿げた神々だけを歌い上げていればよかった。
罪深い死すべき定めの人間の、徳の見せかけ、つまり
偽装された罪も、彼等詩人達によって、崇拝された。
英雄達の霊も同様である。彼等の比類なき功績は、
オリュンピア競技会での二輪戦車を操ってのものである。[35]
なぜ、名高い歌人達よ、あなた達は、
ヘブライ人達が愛する真の神を無視するのか。
この存在は、余りに完全で、自立しており、崇高で
何にも頼ることなく賢明で、何にも頼ることなく幸福で、自足している。 (250)
ピンダロスよ、貴公は、どの様な賞賛という御香によって、
この存在を愛したことによってでの栄光を手にする英雄達を、芳香で満たしていることになったのであろうか。
いったい何であろうか。あなた達が罪深いということよりも残念なこととは。
あなた達の誤った考えが、あなた達の数々の過ちを、赦すことの出ないものとしてしまったのだ。
厚い雲に覆われたあなた達の精神は、
徳の女神を過小評価してはいたが、
あなた達の詩歌の中において、徳の女神の姿を敬うことが出来ていたという事によって
少なくとも、あなた達は、私達の時代よりも優位に立っている。
ああ、そなた達よ。かくも名高い主題を軽視して、
価値の無い事物だけを自分の精神に提供している者等よ。 (260)
現代派の人々よ[36]、私の正しい批評を許してくれ、
もし私がこの場で、あなた達の愛するリラ詩人[37]をあえて非難していたとしても。
もはや時宜には適ってはいない[38]が、私の感覚には快い
リラ詩人の軽薄な甘美さは、私の理性を不快にする。
それ故に、往時、人々はキタイローン山[39]で
ウェヌスによって、祝祭と秘儀を上げることが出来ていたのだ。[40]
パポス[41]では、あなた達の技芸による助けを必要としていた、というのに、
甘ったるいアムピーオーンの如き者達[42]よ、あなた達は遅過ぎた様である。[43]
立ち去ってください、ムーサ達よ、採るに足らない物の精神から立ち去って下さい。
はかない美の女神に対して、賞賛というそなた達の香を、与えるのではない。 (270)
そなた達の詩歌の甘美さに浸りきった者達をして、
そなた達の詩歌によって、偶像崇拝させしむのは、止めるのだ。
ご婦人の眼に火を燈すのは、もうたくさんだ。

煌めく炎によって輝くのを、人が目にできるのは、そなた達の著作の中で、極々僅かである。
そなた達の詩歌に不滅の輝きを与える為には、
祭壇で燃える聖なる火へへと到達せよ。
　もし、そこへと到達したならば、「何と、私達の精神に火が付いてしまった。
誰が、私達のエールの本を解釈したがるようになるのだろうか。」と、そなた達は言うのではないか。
天上の美の女神達にかなり惚れ込んでしまったどんな心が、
私達の合奏に、正当な価値を与えることができるようになるのであろうか。　(280)
今日、全てのそれらの詩歌が、鉄格子の奥、
又は、信心深い家庭のほの暗い奥まった場所へと、送り戻されてしまっている。
　間違っている。大挙して、カンプラ[44]のモテット[45]へと、
世俗作品であるオペラの愛好家達が、駆けつけているのを見よ。
礼拝堂で歌っている聖なる合唱団が、
祭壇の荘厳な華美さを愛させしめたり、
魅了された宮廷人の関心を集めたり、
又、宮廷人の心に在る激しい野心を留めたりしているのを、見よ。
そうすると、これらの神々しい合奏の神々の中の誰が、私達の気に入り得るのであろうか。
それは、外国語の雑然とした音であろうか。　(290)
ラテン語だけが気に入られるのであろうか。一方、音を付されたフランス語というのは、
私達を感動させる力も美しさも持ち合わせないのであろうか。
　ユーフラテス川が、波を掛ける岸で、
聖なる民の深い悲しみにもかかわらず、
残忍な征服者達が、
涙を流すレビ人達を集めて、あらゆる合唱団を作り、
彼等の苦悩が、柳の下に吊り下げられたままにしていた
竪琴を、彼等の手の中で再び和ませ、
また、彼等の消え入りそうな声に、絶え間なく
彼等がかつて歌っていた大変美しい聖歌こそを、要求するのを、人々は幾度目にしたのであろうか。[46]
　(300)
　来るがよい、アッシリア人達よ、来るがよい、夷人達よ、
かの点についての私達のすさまじい嫌悪感を打ち破りに。
少なくとも、お前達の前例[47]は、何と、私達をして、
人々が私達が崇めているのを知っている、かの神への賛辞を表わさせしむるのだ！
　しかし、私は、聖なる聖歌の高貴さを復興させることになる
華々しくそして輝かしい若さというものを知っている。
サン＝シール[48]では、聖なる詩歌を鳴り響かせている。この聖なる地の宮廷は、

神を褒め称えるのを耳にする、という喜びを享受するであろう。
それだから、幾百もの無垢な者の声による、心を喜ばせる音によって、
幾千もの生まれかけの徳が、心に刻み込まれるのである。 (310)
その時、勝利した時のように、神の威厳を通って、
厳かな真理が私達の許まで降りて来る。
幸せな地は其処である。其処は、この世の中で間もなく輝くこととなる
数々の徳が生じてくる多産な源である。
お前達は、あの気高い運河を通って其処で流布するであろう、
主へと捧げる、美しい詩歌よ、神々しい合奏よ！
ブーセ[49]が作った優しい小唄の全部、
バラール社[50]が出版した恋の無駄話、
全てが間もなく色褪せてしまう。私は、シオンの賛歌[51]が
素晴らしい精神を、美しい情熱に致すのを目にしている。 (320)
すでに、競うかのようにして、ランベール[52]、モロー[53]、コラッス[54]は、
彼等は、協和した音の鳴り響くパルナッソス山が抱える最も巧みな者達だが、
天上のヘリコーン山[55]の小道を度々登っている。
そして、間もなく、神火に専念するようになるであろう。
今後は、私達の歌声は、唯一の神に崇拝の念を表わすようになるであろうし、
ルイ王の処で、神のお姿を崇めることが出来るようになるであろう。
　ラシーヌよ、あの変身は君の精神によるもので、
私は、君によるこの様な奇蹟的な出来事を待ち続けていたのだった。
君の名前のみが、至上の威光を描いた見事な絵画である
かくも驚異的なカンティクム[56]を愛させるのだ。 (330)
聖なる書物の神々の美しさについて知らずにいたある者は、
君の新しい著作品の中で、彼等の威厳を強く感じている。
非常に真っ当な趣味を皆に抱かせる為には、
ずっと以前から、彼は高い評価を得ていなければならなかった。
恐らく、ある者は、『エステル』[57]にそれほど魅了させてはいないであろう、
もし、『フェードル』[58]が、その者に対して、君に敬服することを慣らしていなかったとするならば。
そして、あんなにも荘重で、あんなにも優しいあの韻文によって、
かつて君が、エウリーピデースの遺骸を蘇えらせていた時に、[59]
すっかりフランス人に成ったエウリーピデースと一緒になって、ソフォクレースが、
語る為に、君の声の助けを借りていた。 (340)
このことは、私の精神の為の知的餌であった。
より高次の構想の為に、君は、自分の力を出し控えていた。

君は、かくも高名な作家達に従うことによって、
神の列に並ぶ書物の神々にまで昇任する為に、飛翔し続けていた。
君は、彼等の作品の中において、崇高というものに関しての考えを抱いていた。
また、ギリシアは、君に、ユダヤへの道を開き示していた。[60]
確実なものと、真実とに、君はすっかり感銘を受け、
より一層偉大なものに、代わる代わる心を奪われてきたのを私は知っている。
ルイ王の為の君の気取らない散文の女神は、
王の忠実な来歴を書きながら、[61] (350)
君の話しの中に在る有り余る技術と火とが、後裔の時代へと、
君の話しによって、真実を曲げて伝えてしまうのではないか、と一方で危惧しているが、
君の精神が、苦労してやっと、内に押し込めているあの火は、
外に飛び出す為に、君の素晴らしい詩才を解き放ち、
そして、その詩才の高まりの中で、かつて耳にしたことのない歌によって、
ルイ王を守護する主に対して、崇拝の念をまもなく表わすであろう。
　従いたまえ、傑出した作家達よ、ラシーヌへと神の息吹を吹き込む美しい火に。
これからは、君達のリラを主に捧げたまえ。
真の英雄達の徳と、偉業を歌いたまえ。
気高さに欠ける主題は、君達の声を汚してしまう。 (360)

終わり

宗教的カンティクム

I. カンティクム

愛することを知る心が、
穏やかな和音による柔らかい調べによって
自分を表現するという喜びを手にするのだから、
歌おうではないか。しかし、私達の合奏の主題は、
神々しいものでありますように。 (5)
その主題の美しさ、不滅の格調の高さを公にしようではありませんか。
私達の歌は、天への私達の憧憬の溜め息を、強いものとするのだから、
私達の娯楽に於いてまでも、主の栄光を称えましょう。

◆

主が私達にお与えになりたいと望まれる才能を
汚さないように、よく気を付けようではありませんか。 (10)
人間の虚栄の為に、私達の声を用いることを拒みましょう。
歌おう。聖なる調べの中に、
純潔な救済を捜し求めよう、
私達の追放に耐える為に、私達の苦しみを和らげる為に。
主の栄光とお力とを称えましょう。 (15)
私達の務めと、喜びとを一致させましょう。

◆

II. カンティクム

神を愛するという戒律に関して

主よ、貴方の至上の慈愛に見合う為には、
貴方を愛するようにと、私に、貴方はお命じになります。
貴方が私に求めるのは、徳義というものです。
それは余りに高貴で余りに細やかな愛の甘美さを、
不肖の死すべき定めの人間に、熱望する権利はあるのでしょうか。 (5)
余りに甘美な教えに従うということは、何と幸せなのでしょう！

◆

相当に罪深い心が、ここ、下土にあるにもかかわらず、
貴方を愛するに値するものとして認めていないという理由によって、
忘恩に対する貴方の憤激に火が付いているのを、私は知っています。
しかし、主よ、雷という貴方の腕を武装させずに、 (10)
その不浄の心を、現世へと執着させておいて下さい。
その心は、貴方を愛さないことに対して、充分に報いを受けています。

◆

妬む神よ、その害となる焔を消してください。
その焔によって、私の魂が脅えているのが分かります。
もし、私が、貴方への慈愛へと立ち戻ることを、厚かましくも拒んだとしても。(15)
貴方は私を愛しておられます。だから、もういい加減にして下さい。
私に辛さを思い知らせる為には
懲罰の炎で焼くことは、私にはそれほど恐ろしくは思えません、
貴方の愛の炎で焼かれずに生きるよりは。

◆

III. カンティクム

改宗を先延ばしにした忠実なる魂の後悔

主よ、何と罪深いのでしょう、
貴方の辛く険しい道が余りにも長い間迷わしてきた、この心は！
貴方の魅惑を味わうこと、貴方を愛すべきものとして認めること、が
本当になかなか出来ずにいて、
私は何と惨めなのでしょう！ (5)
私が神なしで過ごした、空しい時よ、悲しい日々よ、
私の人生からだけは、ああ、消えてなくなれ！

◆

幾百という不純な秘密事から、そして、幾千という不安定な心配事から、
貴方の頚木は、私を解放してくれます。
おお、我が神よ、貴方に従うことを私の心が誉れとする (10)
幸せな時以来、ようやく、
私は、生き始めたのです。
恩寵の許で流れる、心地よい時よ、幸せな日々よ、
ああ、私は、お前達の持つ値打ちを知るのが余りにも遅すぎました！

◆◆◆◆
◆◆◆
◆◆
◆

IV. カンティクム

教会の聖なる秘跡に関して

まさに厳かな秘跡に於いて、
貴方は、真に
ご自身の栄光を天に轟かせる神であられます。
神のお力は、私の精神に信仰をお与えになります。
主よ、たとえ私が貴方にお目にかかるという幸福に与れないとしても、 (5)
私には貴方を信じるという功徳があります。

◆

死すべき定めの人間の瞼を、眩い光で眩しくさせることのないように、
神秘のヴェールの下で、
貴方は、私たちの眼から逃れておいでです。
主よ、貴方の闇は、新しい形の恩恵なのです。 (10)
まさに厚い雲のおかげで、私は、
光の源まで近づいているのです。

◆

おお、暗闇の中の真理よ、
おお、好ましき暗さよ、
貴方達は、主を、死すべき定めの人間へと近づけてくれます。 (15)
主は、私達の脆弱な視線から、ご自身の燦然たる輝きをお隠しになられます。
しかし、主は、私達の為に、ご自身の威光を、翳らせる事を望まれれば望まれるほど、
主の慈愛は、私達にとって感得できるものとなります。

◆

V. カンティクム

天におられる聖人達の幸福

二の歌声

徳の困難な険しい道、ほとんど踏み固められていない路に沿って
いつでも進んで行きましょう。
大変辛い途に於いて、
かの神の証は、私達を支えてくださるに違いありません。
死すべき定めの人間の未来を予測することの出来るこのお方は、 (5)
徳の内に於いて、不可能なことを何か見出すことが有り得るのでしょうか。

一の歌声

私達の神が私達にもたらして下さる
かなり稀有なる幸福というものは、どういうものなのか
人間の眼は見ることも、
そして、耳は聞くことも出来ませんでした。 (10)

二つの歌声一緒に

私達に対する神の慈愛が、核心に至るまで知られていることが、
そのことに考えが及ぶ為には、必要でございます。
神のお力の広大な広がりを
推し量ることが必要でございます。

一の歌声

墓場の恐ろしさの中から、神に選ばれし人々を救い出す為に (15)
ある新しい天は開いているのだと、私は知っています。

もう一つ別の歌声

私は、新しい地が、
福者達の永久の棲まいを建てているのを知っています。

第一の歌声

新しい天、これは、投下する為の雷を決して持ち合わせません。
新しい天、これの穏やかな姿は、 (20)
私達の目から自身の姿を見えなくすることの出来る
覆いや雲を決して持っていません。

第二の歌声

新しくて望ましい地は、
あらゆる不幸を受けつけません。
嘆傷すべき苦悩は、決して立ち入らないでしょう、 (25)
人間からは切り離すことの出来ない伴侶であるここ、下土には。

一の歌声

ああ、貴女よ、お前は、威光を死に至らしめる暗礁であり、
柩の闇の住人です。
お前故に、全ての者が嘆き悲しみ、全ての者が涙しています。
お前の矢の矢先は、そこでは衰えるに違いありません。 (30)
あの魅力的な棲まいに、
ああ死よ、恐ろしい死よ、お前は決して立ち入れないでしょう。

合唱

何物も、そこに於いては、数々の魅力を妨げることは出来ません。
最高の統治者は、その魅力で、
人間の心を満たしてしまうに違いありません。 (35)
更なる歎息、更なる不安。
かの御柱御自身は、御自身の御手で、
あらゆる私達の涙を拭いたいとお思いです。

一の歌声

この地に於いて、あらゆる私達の願望を満たすに違いない
数々の楽しみに、誰が異を唱え得ることが出来るでしょうか。 (40)

もう一つの歌声

いつも至上の美を目にしていても、
その神々しい魅力に対して感嘆するのに

疲れるということはありません。
人々がその美を崇め、愛するのを次第に強く感じること、
その非常なる愛に没頭し、我を忘れること、 (45)
そして、神そのものへと変化すること、
ああ、天よ、これらが、貴方様が私達の心に対してお約しになられる福利です。

もう一つ別の歌声

ここ地上では、動きの速い太陽は、その急な運行中に、
私達のあらゆる空しい満足の
機会をもぎ取り、 (50)
その代わりに、悲しみや苦しみを、もたらします。
天空の棲家では事情が異なります。
そこでは、神々しい太陽は、いつでも固定されており、不動であって、
恒久の環の中にあって、一日を作り出しているに過ぎないのです。
そこでは、私達の心は、いつでも穏やかで、 (55)
かつて私達の心が苦しんだ災禍がまた巡り来るのではないかと、決して恐れてはいません。

合唱

ああ、うっとりするような浄福よ、
貴方達を称えて歌うには、私達の声は無力です。
しかし、貴方達のえもいわれぬ甘美さは、
福利です。その福利は、私達の心に希望を許します。 (60)

一の歌声

この様にして認められた希望に包まれて、
主よ、私は貴方に身を捧げます。
俗世と、その最も快い福利とは、
私の尊敬の念には相応しくないものです。
そうです。私は、ああ我が神よ、貴方だけが、これからは、 (65)
私の願いの気持ちの中に当然のこと存在する不安を
落ち着かせ得るのだ、と感じています。
私の不死の魂にとっては、
決して消えることのない福利が必要です。

合唱

私達は、ああ我が神よ、貴方だけが、これからは、 (70)
私達の願いの気持ちの中に当然のこと存在する不安を
落ち着かせ得るのだ、と感じています。
私達の不死の魂にとっては、
決して消えることのない福利が必要です。

終わり

これらのカンティクムは、サン＝シールにある高名な施設の為に作られ、モロー氏によって歌を付されました。モロー氏は、『エステル』と『アタリー』の音楽に於いて、最近はラシーヌ氏の新作『宗教的カンティクム』の音楽に於いて、たいへん成功しておられます。小生が、この風刺詩にこれらのカンティクムを付したのは、本物の音楽詩の模範を示そうとする意図によるものではありません。小生は、そのような自惚れなど持ち合わせておりません。詩のこの様な様式に対する才をお持ちの方々に、その才を授けてくださった主に対して、詩のこの様な様式のものを捧げることを促す為であります。

註

(1) この手紙は、1958年に出版されたガリマール社によるラ・フォンテーヌの『全集』によると(第2巻1046頁)、失われたもので、モクロワの『死後出版作品集 *Œuvres posthumes*』の註にこの手紙の断片が掲載されており、その日付も1693年10月26日(月)以前であるとしている。

(2) ニコラ・ボアロー＝デプレオー Nicolas Boileau-Despréaux (1636－1711) のこと。

(3) Parnassos: ギリシャ半島のポーキスに在る山の名前。天空を支配する主神として、雲や雨、霰、あるいは、雷を意のままに駆使する者と考えられていたゼウスにとって、雲があり、雷の集まるところとして、また、天空に近いところとして、高山の頂は、そのふさわしい宮居とされた。それ故、ギリシャ一の高山、オリュンポスはもちろんのこと、その他、すべて抜きに出て高い、あるいは高く見える山々は、ことごとくゼウスの屯する場所と思われていた。パルナッソスもその例外ではなかった。また、そのパルナッソスの山麓には、カスタリアーという名の泉が湧いており、その泉には、詩歌文芸の女神達ムーサイが常に来て舞い遊ぶ処と言われていた。

(4) ボアローは、1694年に女性と結婚を批判する風刺詩『風刺詩10 *Satire X : Dialogue ou Satire X du sieur D.****』を出版している。その風刺詩に関しての言及である。

(5) Musa, 複数 Musai: 文芸、音楽、舞踏、哲学、天文など、人間のあらゆる知的活動を司る女神。そ

の数も、三人、七人、九人と伝えられ方に違いがある。

(6) Ikaros:父ダイダロスと共にラビュリントス脱出のために、ダイダロスの発明した翼を身につけて、空中を飛んだが、父の命に従わず、高く飛翔したため、太陽の熱で翼の蝋が溶けて、イーカリオス海に墜落した。

(7) Pindaros (前 522[-18] − 422[-48]):ギリシャの合唱隊用抒情詩人。年少にして作詩と音楽とを学び、20歳で名声を馳せ、特に運動競技勝利歌で有名であった。作品17巻の内、最後の4巻を運動競技勝利歌が成し、これがほぼ完全な形で残されている。その中に、オリュンピア、ピュティア、イストミア、メネアの順に、この四大祭典における勝利を歌った作品44(或は45)を含んでいる。彼は、尚武の気に富む古い型の貴族主義者で、壮大な文体、複雑な韻律を用いギリシャ最大の抒情詩人である。

(8) Apollon:ギリシャ神話のオリュンポス十二神の一人。ゼウスとレートーの子、アルテミスの双子の兄弟。詩歌、音楽、医術、弓術、予言、家畜を司る神、また光明の神としてポイボス「輝ける」なる呼称を有し、ときに太陽と同一視される。彼は、ギリシャ人にとって、あらゆる知性と文化の代表者であり、律法、道徳、哲学の擁護者でもあった。

(9) Bakchos:古代ギリシャの神、ディオニュソスの別名。豊穣と葡萄酒の神である。また、この神は、女性達に熱狂的に崇拝されており、その崇拝は、集団的興奮と恍惚境へと到る祭儀を伴っていた。女性達はこの神によって、狂気へと到り、野山をさまよい、松明やティルソス(ツタを巻き、先端に松笠をつけた杖)を振り回しながら、野獣を捕らえて、引き裂いて食らった、と伝えられている。

(10) les Amours:1680年に出版されたリシュレ Richeletのフランス語辞典では、以下のように「amours」という語を説明している。「この語は、複数形で、ウェヌスの随伴物であると見なされている悦楽を意味する。」となっている。ここでは「les Amours」と頭文字が、大文字になっているので、「愛の悦楽の神々」と訳すことにした。

(11) Tirsis:誰のどの作品の登場人物のことを想起させようとしているのか、はっきりと確実に同定は出来ないが、モリエールの戯曲『エリード姫 *La Princesse d'Élide*』の第四幕間劇に登場するティルシスのことではないかと、考えうる。第四幕間劇には、リュリ作曲によるティルシスの歌う以下のエールがある。

ああ!沈んで思い煩って僕が歌っているのを、君は聴いている。
しかし、僕は全然気分が晴れない。おお、誰よりも美しい人。
君の心を、僕は、感動させているのではなく、
君の耳を感動させているのか。　(拙訳)

(12) Clymene:これも、誰のどの作品の登場人物のことを想起させようとしているのか、はっきりと確実に同定は出来ないが、ラ・フォンテーヌのオペラ『ダフネ *Daphné*』に登場するダフネの腹心の女性クリメーヌではないかと、考えうる。第三幕第一場のクリメーヌの詞に以下の部分がある。

静かさの好きなこういった場所では

皆が愛を語っているように、私には見えるわ。
ここでは、鳥達が、夜も昼も、
愛の特徴である優しい激しさを称えているわ。(拙訳)

(13) Iris: 虹の女神。天空を結ぶ虹として、神々の使者とみなされた。長衣の上に軽衣を纏い、有翼の姿で表されている。

(14) Anakreon (前570頃－485頃): ギリシャの抒情詩人。彼は長生きであったと、後代の文献は伝えている。彼の詩の中にも、自分の白髪頭への言及がある。やがて図像的に定式化された姿では、老人で、酩酊しており、恋の歌を歌っている。「恋の神エロースは、この歳になっても私を翻弄する。どうか手荒に扱わないでもらいたい」というのが、彼の歌の基本的なスタンスである。彼の歌は、僭主の宴席で披露されていたと考えられ、酒と、少女と少年のいずれにも向けられた恋とが、彼の歌の中心を占めている。

(15) Albius Tibullus (前55頃－後19): ローマのアウグストゥス帝時代のエレゲイア [詩の一形式] 詩人。彼の作品は『ティブルス全集 *Corpus Tibullianum*』に収められており、はじめの2巻が彼の作品である。この全集のテーマは、富への軽蔑、戦争への恐怖 (ティブルス自身、前31年から前27年の間に、ガッリアや近東遠征に参加)、恋と牧歌的生活への憧れ、生と恋の享受、といったものである。

(16) Quintus Horatius Flaccus (前65－前8): ローマの詩人。初めは主として風刺詩の類を書いていたが、やがて彼は文才を認められて、ウェルギリウスの口添えを経て、当時の政界の実力者マエケーナース [Gaius Maecenas (? －前8): オクターウィアーヌスの腹心の部下。ウェルギリウス、ホラーティウス、プロペティウスはじめ、多くの文人のパトロンとなる。「芸術支援」の意味で使われる「メセナ」という語は、彼の名に由来する。] の知遇を得る。オクターウィアーヌスにもつながったサークルに属し、「桂冠詩人」の地位も得る。詩作は、風刺詩、抒情詩、オード、書簡体詩などに及んでいる。いつの世にも変わらぬ人間性や人生の種々相を歌った。また彼の『詩法 *Ars poetica*』は、詩人自身の書いた詩論として古来尊重されている。

(17) ホラーティウスは『カルミナ (歌章) *Carmina*』の中に於いて、当時の政治や社会、そして、人間の内面を描いた。人間の内面を描いたものの中では、人生の儚さ、流転、理性にコントロールされた快楽、心の平静と満足等をテーマとしている。また、もちろん恋もテーマとしており、ウェヌスを賛美した詩もある。Cf.『歌章』1•30.

(18) Cf. Molière. *Amphitryon*. v.292.

(19) 音楽も詩も、伴に女性名詞である為である。La Musique La Poësie

(20) le Dieu vivant:「Le grand Dieu vivant」という語について、1694年刊行のアカデミー•フランセーズの辞典は、「vivant, ante」の項目で以下のように、説明している。「神のみが自足する、ということを強調するために、特に、Le grand Dieu vivant という語句を用いる。」とある。それ故、ここでは、「自足せる神」と訳した。

(21) 聖書の中に、歌が初めて登場するのは、『出エジプト記 15.1-18.』である。ここで、モーセとイ

スラエルの民は主を賛美して、歌を歌っている。このことから、この「最初の者 le premier」というのは、聖書の中における「最初に歌った者」の意であると考えられる。

(22) Cf. 出エジプト記 14 − 15.

(23)「S 王」というのは、ソロモン王のことと推測される。Cf. 詩編 72.

(24) L'esprit:1694 年刊行のアカデミー・フランセーズの辞典に於いて、「esprit」の項目で、数多ある語義の中に、「時に、想像力のみを意味する」という説明を見出すことが出来る。よって、ここでは文脈上、「精神」という訳は適当ではないと考えたので、「想像力」と訳した。

(25) 巨人ペリシテ人というのは、ゴリアトのことである。聖書の記述に従うと、その背の大きさは、6 アンマ半 (1 アンマ = 約 45cm) なので、約 2m92cm となる。Cf. サムエル記上 17 − 18.7.

(26) Agamemnon: アルゴス、ミュケーナイの王。トロイア戦争の際には、総大将となる。

(27) ホメロスの『オデュッセイア』に以下の記述がある。「女も初めは不倫の行為を拒んでいた――妃クリュタイムネストレ (クリュタイムネストラ) も、もともとは道理を弁えた女であったのだ。それに彼女には、アガメムノンがトロイエに出陣の折、妻の身に気を配るよう、懇々と申し付けていった楽人が付き添っていた、しかしやがて妃が、宿命の糸に絡まれて屈服を余儀なくされたとき、アイギストスはその楽人を人の住まぬ島へ連れ出し、置き去りにして野鳥の啖(くら)うにまかせた。そうしておいて今や互いに望み望まれつつ、女を己の屋敷へ連れ去った。」ホメロス『オデュッセイア』(上) 松平千秋訳 (岩波文庫、1994 年)、72 頁。

(28) Aigisthos: トロイア戦争にアガメムノーンとメネラーオスが出征している間に、アガメムノーンの后クリュタイムネーストラーと通じ、アガメムノーンをその帰国に際して殺害した。

(29) Cf. アイスキュロス『アガメムノン』。

(30) Amphion: ゼウスとアンティオペーの子、ゼートスと双子の兄弟。アムピーオーンはヘルメースより竪琴を授かり、その名手となって、テーバイ市の城壁を建造するとき、彼の楽の音に石が自ずから動いたと伝えられる。

(31) Arion: レスボス島出身の詩人、音楽家。南イタリアとシシリアで音楽の競技に出席、多くの賞を得て、コリントスの船で帰る途中、船乗り達は彼を殺して、その所持品を奪おうとした。彼は最期に一曲演奏することを乞い、歌い終わって、海中へと投身したところ、歌を愛するイルカが集まってきて、彼を背に乗せてタイナロン岬に送り届けた。

(32) Cf. サムエル記上 16.14 − 23.

(33) Madrigal: イタリア起源の詩の一形式で、16 世紀にフランスにもたらされ、17 世紀のプレシオジテの詩人達の間で盛んに詠まれた。フランスのマドリガルの元となったイタリアのマドリガルが、短長格のもので、12 詩行を超えないものであるのに対して、フランスのマドリガルは、自由な形式をとる韻文となっている。

☆ [原注] ドゥ・リュリ氏は、ミゼレーレを作曲した。これは、傑作である。[訳注] この Miserere (LWV 25) は、1664 年に作曲されたものと考えられている。この曲は、当時から広く傑作として考えられていた作品で、セヴィニェ夫人はこの曲を聴き涙したと伝えられている。

(34) Medor: 1685年に上演された、リュリ作曲、キノー詩による音楽悲劇『ロラン *Roland*』の登場人物。アフリカの戦士であるメドール Medor は、主人公ロラン Roland も愛する中国の女王アンジェリク Angélique と恋に落ちる。

(35) ピンダロスの『オリュンピア祝勝歌集』には、14の祝勝歌があり、その夫々は、騎馬優勝、戦車競争優勝、騾馬車競争優勝、ボクシング優勝、レスリング優勝、長距離走優勝、といった競技の優勝者を称えた歌となっている。ピンダロスは、そこで、運動競技を記録することを目的とするのではなく、優勝者の神々しい由緒ある血統を称賛するという形を採っている。

(36) Modernes: 新旧論争 La Querelle des Anciens et des Modernes における「現代派の人々」を指すものと考えられる。

(37) Lirique:「lyrique」という語は、今日では通常「抒情的な」の意、つまり「個人の感情・情緒を表現した」の意として用いられるが、元来は「リラにあわせて歌われた」との意であった。1680年に出版されたリシュレのフランス語辞典では、以下のようにこの語を説明している。「この語は、主にギリシャやローマの詩について語る時に用いられ、リラにあわせて歌われるものを意味する。[ピンダロス、アナクレオーン、ホラーティウスのオードは、古代人の *lirique* 詩の仲間である。フランス人の詩人達が作った歌や歌う為の韻文のみを本来は、フランス語で *poësie lirique* ないしは *vers liriques* と呼ぶのである。フランス人の詩人達はこの種の詩に秀でている。]」この語は、以上の意であるが、語頭が大文字であるので「リラ詩人」と訳すこととした。

(38) これの意味するところは、「恋愛や酒を詠ったエール」が、世間で流行らなくなって来た、ということを意味するのでは無いと考えられる。なぜなら、例えば、以後30年間以上に渡って出版され続けることとなる、恋愛や酒を詠ったエールの歌集である『様々な作者達によるエール・セリューとエール・ア・ボアールの曲集 *Recueuil d'Airs sérieux et à boire de différents auteurs*』が、この風刺詩が出版される前年の1694年からバラール社から月刊で出版され始める、という事実が有るからである。では、何を意味するかと言えば、信心派が権力を握っているという当時の社会的状況に適っていない、ということを意味しているものと考えられる。

(39) Kithairon: アッテイカとボイオーティアの間に横たわる山脈。この山の山中では、ディオニュソスの秘儀が行われていた。

(40) エウリピデースの『バッコスの信女』の中に以下の、テーバイ王ペンテウスの台詞がある。「女どもが、バッコスの祭であるとか称して、家を明け、昼なお暗い山中をうろつき廻り、ディオニュソスとかいう新来の神をあがめて踊り狂っているという。一座の中央に酒をみたした甕を据え、てんでに人目のつかぬ場所に忍んで行っては、男どもの欲情をみたし、神に仕える巫女の役目だなどと申しているが、じつはバッコスならぬアプロディテの祭といったていたらくであるそうじゃ。」エウリピデス『ギリシア悲劇Ⅳ バッコスの信女』エウリピデス(下)、松平千秋訳(ちくま文庫、2001年)462頁。

アプロディーテー Aphrodite は、ギリシャの愛、美、豊穣の女神である。この女神は、ローマでは、同じ性質の女神ウェヌスと同一視されるようになる。

(41) Paphos: パポスは、キュプロス島に在り、パポスは、美と愛欲の女神であるアプロディーテーの生誕の地として知られている。パポスには、アプロディーテーの大社が設けられていた。このパポスを建設したのは、建築家で音楽家のキニュラースである。

(42) Doucereux Amphions: Amphionの複数形Amphionsという語が使われているが、アムピーオーンは、固有名詞で一人しか存在しないので、「アムピーオーンの如き者達」と訳した。

(43) この二行の意味ははっきりとしない。

(44) André Campra (1660 - 1744): 作曲家。1674年より生地エクサン＝プロヴァンスの大聖堂で音楽教育を受け始め、1681年にアルルの聖トロフィーム教会の楽長、1683年にトゥールーズの聖エティエンヌ教会の楽長に任命される。1694年には、パリのノートル・ダム大聖堂の楽長の地位を手に入れる。1700年には辞任して、世俗作品に専念するようになる。1697年に最初の劇作品『優雅なヨーロッパ *L'Europe galante*』を発表、大成功を収める。18世紀に入ってまもなく、王立音楽アカデミーの指揮者となり、パリで作曲家として知られるようになる。生涯に15以上のオペラ・バレやトラジェディ・リリックを作曲し、繰り返し上演される。

(45) Motet: 音楽のジャンルを示す語であるが、その定義はかなり変化している。17世紀に於いては、‹聖体降福式› —— その聖務は、本質的に聖体のパンの顕示と、聖書からの引用を除く、基本的にラテン語による歌詞の自由なポリフォニー楽曲という意味での‹モテット›で成り立っており、それに‹タントゥム・エルゴ Tantum ergo› や沈黙の聖体降福式、退場の歌などが続く —— という機会において演奏される楽曲を意味していた。そして、その歌詞がラテン語である限り、歌詞の由来は問われなかった。この意味を持った‹モテット›は、ヴェルサイユ宮殿に於いては、聖務の荘重さの度合いに応じて、二つの分野に分かれた。一つは‹プティ・モテ petit motet (小さなモテット)›、もう一つは‹グラン・モテ grand motet (大きなモテット)›或は‹大合唱のモテット motet à grand chœur› である。この二つは、合唱の規模も、アンサンブルの規模も、曲の規模も異なっている。

ここで話題になっているカンプラは、この風刺詩が出版される前年 (1694年) にパリのノートル・ダム大聖堂の楽長に就任しており、またこの風刺詩が出版されたのと同じ年 (1695年) に最初のモテット集を出版している。このことから考えて、この風刺詩の作者は、ノートル・ダム大聖堂でカンプラ自身により演奏されているモテットのことについて、言及していると考えられる。

(46) Cf. 詩編 137. これは、「バビロンの捕囚」のことである。つまり、バビロニア王ネブカドネツァル (前605 − 562年在位) によって前598年から3回にわたって行われた南ユダ王国での捕囚のことである。この捕囚で、約4600人の成人男子がバビロニア国内に移住させられ、前538年ペルシアの王キュロスの帰還命令発布までの約60年間、外国での生活を強いられた。

(47) Cf. 列王記下 15.29, 17.5 - 7. これは、アッシリア王ティグラト・ピレセル三世 (前744 - 727年在位) の治世下における捕囚を皮切りとした、北イスラエル王国での捕囚を指している。イスラエルの民が捕囚の憂き目に会うのは、主に対して罪をはたらき、異教の神々の畏れを敬ったからであると『列王記下 17.7 - 12.』に書かれている。

(48) Saint-Cyr: ルイ14世の妻であるマントノン夫人が1686年に、ヴェルサイユの西にあるサン＝シー

ルの地に建てた Maison Royale St-Louis de Saint-Cyr の事を指す。そこは、経済的に苦しい軍人や貴族の子女約 250 人を住まわせ、敬虔と簡素を美徳とする教育を施す教育施設であった。この施設で、上演されたり、演奏される為に作られた作品には、重要なものが多い。モローにより音楽が付されたラシーヌの『エステル *Esther*』『アタリー *Athalie*』はマントノン夫人依頼により、サン＝シールで上演された。また、ラシーヌの『宗教的カンティクム *Cantiques spirituels*』も、ド・ラランド、モロー、コラッス、マルシャンの夫々によって音楽を付けられて上演されている。更に、3 人の重要な作曲家、モロー、ニヴェール (1686 年から 1714 年までここで、オルガニスト、歌唱教師を務める)、クレランボー (ニヴェールの後継者、1721 年に息子にその地位を譲るまで) が、この施設の音楽の営みの為に音楽を書いた。彼等の中でも、ニヴェールとクレランボーはこの施設の為に、およそ 100 曲ものモテットを作曲している。その他、サン＝シールの図書館には、膨大な曲が所蔵されており、そこには、ド・ラランド、カンプラ、モンドンヴィル等の曲も含まれている。1793 年に閉鎖される。

(49) Jean-Baptiste Bousset (1662－1725): 作曲家であり歌手。ルーヴル宮の礼拝堂、アカデミー・フランセーズ、科学アカデミー、碑文・賞牌アカデミーの楽長であった。35 年に渡って彼が作曲したエール air の自身による演奏で大成功をした。1690 年から 1709 年の間に彼は、エール・セリユー airs sérieux やエール・ア・ボアール airs à boire の曲集を 40 冊以上も出版している。また、1693年と 1695 年に『バッコスの牧歌 *Eglogue bachique*』を出版している。

(50) Ballard: フランスの音楽出版業、印刷業者の一族。店は 1551 年に設立され、1788 年まで続く。出版した作品には、膨大な数のエールや、リュリやカンプラのオペラ、シャルパンティエ、ド・ラランド、クープラン、ラモーの作品などが含まれる。

(51) Sion: 本来はエルサレムの東南部の丘の名前であるが、後には神殿あるいはエルサレム全体を指す名称となった。神殿とは、旧約のソロモン王が建造した神殿のことである。『詩編』の中にある賛歌の多くは、その神殿で歌われていた賛歌である。

(52) Michel Lambert (1610－1696): 歌手、作曲家。エールを主に作曲する。まず、パリでルイ 13 世の兄オルレアン公ガストンに仕える。青年になってからは、公の娘のマンパンシエ夫人に仕えた。やがて、フランスの歌唱法の最大の巨匠と見なされる様になり、プレシューズの間で最も人気を集める歌手兼作曲家となる。1661 年よりルイ 14 世の宮廷室内楽長に任じられる。彼の娘マドレーヌは、リュリの妻となる。そして、王立音楽アカデミー創立の折には、歌手を養成し、歌のデクラマシオンを教えた。

(53) Jean-Baptiste Moreau (1656－1733): 作曲家、教師。アンジュで生まれ、アンジュ大聖堂で音楽教育を受ける。ラングル大聖堂、ディジョン大聖堂で音楽教師を務めた。その後、国王ルイが貴族の娘たちの為の学校を設立する準備をしていたときに、王の目に留まった。同学校は、86 年にマントノン夫人によりサン＝シールに設立されている。モローは王に招聘されて同校の為に曲を作ることとなり、ニヴェールと共に常任音楽家として仕えた。モローが後世に残る名声を得たのは、ここでの仕事、特にラシーヌとの共同作業によってである。89 年の『エステル』、91 年の『アタ

リー』、95年の『宗教的カンティクム』がラシーヌとの共同作業によってのものである。その他に、その他の劇作家の台本による劇作品を幾つか残している。モローは、フランスにおけるモテットの基礎を築くのに重要な役割を果たした。しかし、それ以上に『エステル』と『アタリー』に於いて大きな功績を果たしている。また、彼は作曲及び歌唱法の優れた教師と見なされており、作曲の弟子には、モンテクレール、クレランボー、ダンドリュー等の名だたる作曲家達がいる。

(54) Pascal Colasse (1649-1709): 作曲家。リュリの弟子で、1677年リュリの紹介でパリ・オペラ座指揮者となる。1683年以降は、王室礼拝堂副楽長を務め、1687年師リュリの死に際しては、リュリが未完のまま残していったオペラ『アキレウスとポリュクセネー *Achille et Polyxène*』を完成させるように指名されている。ラシーヌによる『宗教的カンティクム *Cantiques Spirituels*』(1695年)に曲をつけたり、王室音楽アカデミーの為に10数曲のオペラを書いた。コラッスは、リュリの精神的息子と当時見なされていた。

(55) Helikon: ボイオーティアのコーバイス湖とコリントス湾との間にある山の名。山中にヒッポクレーネー『馬の泉』(ペーガソスが足で打った点に湧き出したと伝えられる泉)とアガニッペーの二つの泉があり、ムーサ達はこの泉のそばで集まり、歌い踊ったので、この泉の水は、詩人に霊感を与えるものとして名高かった。

(56) 1694年9月、10月に、ラシーヌが作詩し、モローが作曲した『宗教的カンティクム *Cantiques Spirituels*』が、国王の御前で演奏され、年末に刊行されている。

(57) «Esther»:1689年1月26日にサン＝シール女子学院で上演された作品。題材は、旧約聖書に基づいており、ジャン＝バティスト・モローの作曲による合唱の入った悲劇となっている。

(58) «Phèdre»:1677年1月1日に、ブルゴーニュ座で上演された悲劇。題材は、エウリピデースの悲劇『ヒッポリュトス *Hippolytus*』(前428年)である。

(59) ラシーヌが、エウリピデースの作品に取材して、劇作品を著していた時との意。

(60) ラシーヌが、古代ギリシアの作家に、その題材を求めた作品を書くことから、『エステル』と『アタリー』という、聖書にその題材を求めた作品を書くことへと、転向したという事実を指しての表現である。

(61) 1677年9月に、ラシーヌが、ボアローと共に、国王の修史官 Historiographe du Roi に任命されたという事実を指しての表現である。